「一日の師は一生の師」

野澤　領子

長年日本語を教えていると、いろいろな国の人たちとの出会いがある。しかし関わった受講生を訪ねることは、そう多い事ではない。
その中から、四川省からの研修生を訪ねた時を思い出してみた。

ここ数年四川省からの県費研修生がほとんど来なくなったが、数年前までは、毎年看護師や医師、四川省職員、教師など数多く来ていた。

四川省はどういうところなのか聞いてみると
「省のなかに飛行場がいくつもあります」
「果物が沢山あって美味しいです」
「車や人がたくさんあってにぎやかです」
「マーボー豆腐や火鍋が有名です」
「楽山の大仏やジャイアントパンダが有名です」
・
・
次から次へと出てくる。

毎年出会いがあるにも関わらず、一度も行ったことがないのもさびしい。
「《一日の師は一生の師》中国にはこういう諺があります」
「本当に来てください」何度もそう言って帰国して行った彼ら。彼らがまだ日本語をしっかり覚えているうちに、一度訪ねてみたい。そんな思いがだんだん募り、ついに 2007 年 3 月成都に降り立った。

四川省の省都である成都は、蜀の時代の中心であり、落ち着いた都市であった。

北京で乗り継ぎ、成田から 9 時間程で到着した。
歴史を感じさせる「杜甫草堂」「都江堰」や曲芸鑑賞など一日観光をした。
友人と二人で行った私たちについてくれたガイドは、2006 年中国全土でのガイドコンテストで優秀な 10 人に選ばれたという。日本語は彼だけ。変なくせもなく実にきれいな日本語を使っていた。

翌日には、研修生たちは夫婦で何時間もかけてホテルまで訪ねて来てくれた。中には 5 時間かけて来てくれた研修生もいて、改めて四川省の広さに驚いた。研修生の職業は、脳外科医だったり、精神科医だったり、口腔外科医だったり、看護師長だったりと、みんなそうそうたるメンバーだった。日本に研修に来ると格が上がったり位があがるそうだ。
その日はみんなで「武候祠」「楽山の大仏」「峨眉山麓」など観光地を案内してくれた。そして有名な火鍋をごちそうになる。研修中に火鍋を絵に描いて説明してくれたが、百聞は一見にしかず。成程、説明してくれた絵のとおり日本の「お鍋」のようなものだがお鍋の中は真っ赤な唐辛子色。私たちは多分辛くて食べられないだろうとすすぎ湯カップをつけてくれた。
半端でない辛さだったがおいしかった。また、配慮もうれしかった。
夜は別の年の研修生が子どもを連れてホテルを訪ねてくれた。研修生同士連絡を取り合ったそうだ。

「武候祠」

「都江堰」

「峨眉山麓」

研修生親子

次の日研修生の一人の弟さん(会社を持っている)まで家族で来て、楽しいドライブをした。3 月なのに桃の花が咲き、それも掛け軸などで見かける山全体が桃・桃・桃。しかしそれは私たちが想像するような桃畑ではなく、まるで野山に群生するかのように咲き誇っていた。
道端ではビワを売っている人たちもいて「果物が沢山あっておいしいです」この言葉に納得する。気候は山梨県より少し暖かいくらいだった。街は若い人たちであふれ、素朴で元気がよかった。

私たちが四川省を訪れた後、一人の研修生の旦那さんは「日本へ行って富士山に登りたい」という夢を持ち、日本語を習い始めたという。

またある研修生は、昨年の 3 月の大震災のときも心配して電話をかけてきてくれた。放射能汚染のニュースのときには「生活品で必要なものを送るので教えてください」とか「もし避難するような時は成都も考えてみてください。いつでも待っています」といったメールも届いた。
山梨県に 1 年近く住んで研修していたにも関わらず、日本―地震―放射能―危険―避難。こんな図式になってしまうのか。そうは思いながらも彼らの優しさ

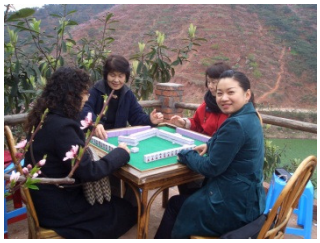
がうれしかった。「一日の師は一生の師です」そう言った言葉を思い出した。

たいして良い師ではなかっただろう。今もってそうかも知れないが。
日本語という言葉を通して、日本人の心、日本の文化、日本の生活、日本の歴史(これはかなり難しいが)などを伝えられれば良いと思っている。

日本語教師とは、いろいろな国の人たちに日本語を教えながら、実は日本についてたくさん考えさせられる機会があり、楽しい関わりであるということを改めて教えられる日々である。

ビワ売り

桃山


桃山で野外麻雀